

# 近代イギリス陸軍の衛生改革

## —実践的ヘルス・ケア知識の導入—

秋山ゆり子

ロンドン大学キングス・カレッジ

受付：平成19年8月2日／受理：平成19年12月21日

**要旨：**本稿は19世紀末から20世紀のイギリス陸軍によるヘルス・ケアと健康指導の進展に焦点を当てる。市民生活で男性は健康、栄養、調理の知識を身につける機会に恵まれなかったが、軍隊活動はヘルス・ケア知識と技術習得の契機となった。クリミア戦争期から認識されていた兵士個人による衛生管理をイギリス陸軍が実際に導入するまでには時間を要したが、食事の調理作業は実践的な健康知識の伝達に効果があり、陸軍医官はヘルス・ケア指導が除隊後の生活にも役立つことを期待していた。陸軍病院コックから始まった調理訓練は、戦地の全兵士を対象としていった。多くの若い男性が陸軍に入隊して生活習慣を改めたことは、当時のイギリス社会の健康向上にも有益な影響を与えたのであった。

**キーワード：**イギリス陸軍、衛生、ヘルス・ケア

### 1. はじめに

近代イギリス陸軍における健康・衛生管理、すなわちヘルス・ケアは主に男性の手によるものであった。1854-56年のクリミア戦争以降も、イギリス陸軍は海外では風土病への感染を恐れながら野営地を設営し、水質検査や食物調達を行ない兵士の健康を脅かす問題に対応を続けていた。ところが経験に基づく方法に頼って管理の水準を統一できないため、イギリス陸軍は19世紀後半から衛生指導と訓練に踏み切ることとなり、これには医療部門の改革と教育的な訓練活動の実施が不可欠であった。集団生活に重要な兵士個人による衛生管理をイギリス陸軍が実際に導入するまでには時間を要したが、兵士による食物、衣服、野営地運営に関わるヘルス・ケア知識の習得は陸軍全体の健康改善に有益なものとなった。イギリス陸軍の衛生管理問題の変遷は陸軍の医療や食物供給に関係する分野として考察が行なわれてきており、軍隊の記録は男性に限定されるが構成の明確な組織であることから、イギリス国民の健康に

関する歴史研究にも利用されている<sup>1)</sup>。

19-20世紀を通じて、公衆衛生改革と医学研究はイギリス社会の発展に関わっていた。エドウィン・チャドウィックによる1848年公衆衛生法以降、都市の拡大や人口増加に伴い水道や住宅等について法規制が行なわれ、19世紀末までには多くの都市で衛生管理を担当する保健医官(Medical Officer of Health)が伝染病のコントロールに努めるようになった。近代イギリスの公衆衛生改革には、政府、地方行政、医療専門家や慈善活動を含むヴォランティア組織による幅広い活動が貢献したことがこれまでの研究から明らかにされているが、このような影響に加え人々の間に衛生意識が少しずつ浸透したことも社会の衛生水準の向上につながったと考えられる<sup>2)</sup>。健康、栄養、調理など生活に欠かせないヘルス・ケアの知識は男女問わず役立つものであったが、男性は市民生活でそれを習得する機会に恵まれなかった。しかしながら数ある職業の中でも軍隊への参加は、男性が実践的な衛生管理法を身につける契機をもたらしたのではないだろうか。そこで本稿では、近代イギ

リス陸軍の衛生改革としての兵士のヘルス・ケアにまつわる訓練活動を取り上げ、男性に衛生知識が普及した一側面について分析を試みる。

## 2. イギリス陸軍の医療・衛生活動

19世紀後半から20世紀初頭はイギリス陸軍医療制度の再編期であり、そして衛生学、細菌学、病理学や熱帯医学の発展した時期であった。陸軍医療部(Army Medical Department, 1898年よりRoyal Army Medical Corps)は兵士の健康診断や病気治療に加え、食物、居住区、衣服等の衛生管理も行った。とはいえクリミア戦争期に、ブルガリアに赴いたイギリス陸軍の従軍医師で野営地管理の訓練を受けた者は皆無であったため調理場の衛生は保たれず、1855年の春まで石鹸が高価なために兵士は洗濯すら満足にできない状況に陥った。この後1859年より、医官(medical officer)が治療だけではなく衛生管理やヘルス・ケアについても担当することになった<sup>3)</sup>。19世紀後半のインド、エジプト、南アフリカなどへのイギリス陸軍派兵に伴い、病気の原因究明や予防策の調査とともにヘルス・ケアの問題に焦点が当たるようになり、陸軍の規模が1870年の約113,000人からボア戦争期の1902年に約397,000人へと拡大するにつれて健康・衛生管理が医官の重要任務となった。さらに、当時のイギリス市民社会と陸軍の関係にも目を向けるべきであろう。1870年の初等教育法制定が人々の識字率を高めモラルの向上に影響したように、陸軍では1873年初等教育法以降に性病患者数が減少した例があり、これは教育の普及という社会変革が陸軍兵士に反映した表れと考察されている<sup>4)</sup>。このような時期に、イギリス陸軍に入隊した男性たちが訓練活動を通じてヘルス・ケアの問題を意識するようになったことは、衛生管理の知識が少しずつ社会に浸透していくうえでひとつの役割を果たしたのではなかろうか。イギリス陸軍は19世紀後半より医療組織をはじめ軍全体の衛生と食料輸送システムの改善に取り掛かり、緊急を要する案件には病院における兵士の食事問題も含んでいた<sup>5)</sup>。

イギリス陸軍兵士を対象としたヘルス・ケアは、病弱な幼児や患者の健康回復を目標とするも

のとは異なり病気の予防と体力維持を重視した。陸軍医学校(Army Medical School)病理学教授を務めたエイトキン(W. Aitken)は、イギリス陸軍兵士が不衛生な環境で訓練を続けられれば健康を害して陸軍を弱体化し公的資金を無駄にすること、そして彼らが除隊後に病に侵され不自由な生活を送ることを避けるためにも、個人による健康管理が大きな意味を持つと指摘した。イギリスでは軍隊は志願制であり、兵士は国家のために自ら健康を維持することが期待されていた<sup>6)</sup>。すなわち兵士のヘルス・ケアの不理解は戦力低下を招くことから、陸軍は効果的な指導・訓練法を検討したのであった。また、陸軍医学校衛生学教授パークス(E. Parkes)による衛生学の著作が明治期に邦訳されており、イギリス陸軍のヘルス・ケアというテーマが近代日本軍の医療発達と関連がないとは言えない。明治時代の日本陸軍は当時国民病とされた脚気の原因解明に取り組み、兵士の健康状態の検査や衛生管理も実施していた<sup>7)</sup>。このように各国の軍隊は、国家財源の組織として民間に先駆けて科学的な研究を行なうことが可能であり、したがって医学の発展にも影響を及ぼしていたといえよう。

そこでここでは、イギリス陸軍の医療・衛生活動として1860年代から始まった陸軍病院患者の食事改善問題より検討を行なう。次第にイギリス陸軍は兵食改良と食事調理の訓練が、個人衛生と集団衛生を統括して管理するヘルス・ケアに役立つことに着目するようになった。クリミア戦争以降、病院に限定されず軍全体の健康を支えた陸軍コックの訓練と兵士へのヘルス・ケア指導による衛生・健康の知識の浸透が、イギリス陸軍の衛生管理能力を促進した過程について順に考察したい。

## 3. イギリス陸軍の衛生改革と兵食改良

クリミア戦争のイギリス陸軍兵士は、戦場で死亡した者よりも負傷し病死した人数が圧倒的に多かったことが知られている。クリミアでの陸軍医療活動はフローレンス・ナイチンゲールの率いた看護婦により改善したものの、負傷者や病人への手当ては十分ではなかった。兵士は体が動かなくても洗濯をして身体を洗わなければならず、ク

リミア上陸後ずっとノミヤシラミに悩まされていた<sup>8)</sup>。ナイチンゲールは1854年11月から1856年7月まで戦地に赴き、イギリス陸軍の医療組織そのものを改める必要性を痛感し、掃除道具、食器、壊血病を予防する野菜、訓練を受けた看護スタッフ等、多くの支援を本国に要求した。調理が計画的に執り行われないクリミアの陸軍病院の患者は常に予定時間よりも遅れて食事を受け取っており、ナイチンゲールは看護の一環として各患者に適した食事を準備できる小さなキッチンを病院に整備することにも取り組んでいた。このとき既に、優れたコックが病院に必要な専門スタッフであることは明らかであった。ナイチンゲールはロンドンで働いていた経験を持ち、自費でクリミアのイギリス兵の食事改良に尽力したフランス人シェフ、ソワイエ (A. Soyer) と効率的な病院キッチン設備と食事調理法を採択し、健康な兵士の食事にも改良を加え陸軍の衛生問題に対する社会的関心を集めた<sup>9)</sup>。

クリミアでイギリス陸軍兵士の健康を蝕む問題を引き起こしたのは、不衛生な病院や行き届かない看護だけではなかった。現地に届いた食物は運搬の遅延が原因で腐敗が激しく、総量の1/4しか食べられない状態だったのである。軍の食物供給システムに問題があったことに加え、クリミアの気候に耐えうるよう配給した備品も戦地での生活と行軍に適さず、兵士に与えられた調理器具は鍋のみで野戦時の食事調理法の指導も行なわれていなかった。ソワイエが携帯用オープンを使用するまで部隊の大量の食事を一度に調理することは難しく、クリミア上陸時に一人あたりおよそ30kgの重装備に耐えかねて調理鍋などの必需品を廃棄した兵士も少なくなかった<sup>10)</sup>。壊血病予防のために配給する予定だった果物ライムも腐敗した状態で届き、兵士は野菜類の現地調達も試みなければならなかった。彼らが食物の知識と基本的な調理技術を持ち合わせていれば、過酷な環境に耐えて配給された食物を活用し、体調を維持する方法を考えることもできたであろう。米はわずかな燃料で調理が可能であったがコーヒー豆は炒らなければ飲料にできず、調理器具の不足からイギリス兵士は冷めた食事を取ることが多かった。これに対

してフランス兵は適切な調理鍋を用いて香草を利用していたように、知識も豊富であったとされる。ブルガリアにおいて、イギリス陸軍は訓練を受けていなくても調理作業を好む兵士をコックに任用していたが、セバストポリ包囲時は兵士がそれぞれに調理を行なうことになった。しかしその方法がわからない者が非常に多く、そのため彼らは食事を準備できずに野菜の供給もない塹壕で塩漬け豚肉を食べ、ラム酒を飲んで空腹を満たそうとしたという<sup>11)</sup>。

ナイチンゲールの支援を得たイギリス陸軍は、クリミアでの惨劇から間がない1860年より陸軍医学校にて軍事活動に即した外科学、衛生学、病理学、医学 (military surgery, hygiene, pathology, military medicine) などによる医官の専門教育を開始した。医学校は当初フォート・ピット (Fort Pitt, Chatham) に置かれ、3年後に移転したネトリー (Netley, Hampshire) は陸軍医学研究の中心機関となった<sup>12)</sup>。衛生学は新しい教育分野として特に注目を集め、パークスは講義を陸軍医療活動のために『実践衛生マニュアル』として出版した。パークスは居住区や上下水道の衛生管理は、軍隊と市民生活のいずれでも注意を払うべき問題であると指摘して衛生理論と栄養学の関係も解説した。クリミアで不衛生な病院を目の当たりにし、衛生管理法を習得した医官による病院運営を切望したナイチンゲールはパークスに大いに賛同したのだった。近代イギリス陸軍の衛生改革は、ナイチンゲールのような専門家の支持を受けることで調査や研究成果の実用化を進めたといえるだろう。パークスは、調理作業は生理学的な一科学分野であり単なる食事の準備とみなすべきではないと考えていた<sup>13)</sup>。こうして、病院に限らず食事の調理を担当する陸軍のコックは、軍の戦力維持に関係する専門職と位置づけられるようになった。イギリス陸軍による病院付コック訓練の意向は1860年発行の患者の食事調理を扱う指導書にも表れていた。キッチンの管理と調理道具の洗浄法等の技術的な説明にとどまらず、規定時間内に食事を調理して患者の食欲をそそる状態での提供を治療と回復に効果的とする指摘からも明らかのように、陸軍は調理への配慮が医療活動に有意義であるこ

とを理解していたのであった<sup>14)</sup>。食物の栄養は適切な加工を施した食事から得られるため、陸軍は調理作業をヘルス・ケアの一部とする認識を深めていった。

その後エジプト占領を経た1883年の陸軍病院組織に関する調査委員会において、陸軍は看護技術の向上、戦時に備えた軍全体の健康・衛生管理を議題とした。陸軍病院では医官が治療だけではなく、一般の病院で看護婦長が担当するような患者の食事や清掃も監督し、看護兵がその下で作業に当たるといふ管理体制を採っていた。看護兵は混乱した前線でも任務を果たせるような訓練を受けることになり、これに伴い1880年代には陸軍病院コックの訓練も本格化した。この委員会は病院付コックの指導をネトリィとウリッチ(Woolwich, London)の陸軍病院にて行なうこと、そして医官の治療技術と病院運営能力(看護と病室の管理、食物調達、食事調理と衛生管理)を昇進時に審査することも提案した。イギリス陸軍将軍ウォルズレイ卿(Sir G. Wolseley)も、体調の優れない兵士に水、薬や食事を与えられない看護兵では戦地で問題が生じると訓練方法の改善を委員会で指摘し、医療改革として陸軍調理学校の設置も要求したのであった<sup>15)</sup>。こうして陸軍は1884年にネトリィで病院向けの食事調理訓練を行なうようになった。1890年以降も外部の調理学校がオールドショット(Aldershot, Hampshire)、ネトリィとウリッチの陸軍病院で指導を担当し、1904年にはその調理学校で開講した調理上級コースに陸軍医療部から監督コック(superintending cooks)の参加を許可していた<sup>16)</sup>。このような専門性の高い外部団体の関与も陸軍の調理改善に影響を及ぼした。陸軍病院コックの資格は、1894年の規定によると4ヶ月の訓練期間と2回の試験、そして実際に病院で患者の食事調理を担当した後に与えられた<sup>17)</sup>。医療関係者としてのコックを対象とした訓練や資格は一般の病院には存在しなかったため、陸軍の制度は画期的であった。

陸軍病院患者の食事改善とコック訓練やソワイエによる活動が行なわれた時期に、陸軍兵士の食事改良を担う訓練施設も整備されていった。1855年に大尉グラント(J. Grant)は陸軍宿舎用の調理

設備を考案してイギリス軍の食物は他のヨーロッパ軍より良質であると分析し、射撃のように軍隊生活に必要な技術を習得できる調理訓練学校の設立を呼びかけた。グラントの調理設備は食物が栄養価を損なわないことや、行軍用キッチン・ワゴンも少量の燃料で調理でき軍務に適していることが評価された。1861年の陸軍宿舎及び病院衛生改善調査委員会でも、戦時に備えて連隊と病院を支えるコック訓練の充実が提案され、全兵士への調理訓練の実施は理想的であったが、まず調理を専門とする者に限定した訓練を開始することとなった<sup>18)</sup>。イギリス陸軍は2年後に調理指導キッチンをオールドショットに設け、そこで訓練を受けた軍曹(sergeants)が各連隊で指揮を取り調理用燃料の実験も行った。1870年代以降、イギリス陸軍は野営地と病院のいずれにおいても役立つ調理訓練を計画していつでもコックを派遣できるようにすること、さらに全ての兵士が野戦時に食事の調理ができるよう指導することも検討したのであった。訓練施設の規模は1883年に拡大して1891年には陸軍調理学校(Army School of Cookery)と改称、その後訓練活動を継続して1941年に陸軍調理部(Army Catering Corps)を編成した<sup>19)</sup>。陸軍調理学校では宿舎や野営地で食事の調理を担当する技術者の養成だけではなく、陸軍のヘルス・ケアを支える役割をコックが持つ指導を行った。1905年の訓練記録が示すように陸軍コックは病院付でなくとも医官の指示に従い、体調を崩した兵士に適切な食事を提供する事態に備えた訓練を受けていた<sup>20)</sup>。訓練システムが整ったものの、陸軍コックの記録は連隊毎に分かれているために全体数は明示されないが、1870-80年代には訓練施設に教官(Instructor)1名であったところ、1887-88年以降には調理監督官(Superintendent of Cookery)と3名の教官が選出されており、調理を担当するポストの設置により徐々に専門職となったことがわかる<sup>21)</sup>。イギリス陸軍はクリミア戦争以降の陸軍病院患者と健康な兵士を対象とする食事の改善を、総合的なヘルス・ケアに利用する構想を持っていたといえるだろう。陸軍が健康管理にふさわしい訓練と指導法を模索するなかで、市民生活では男性にあまり縁のない家事とみ

なされる食事の調理作業に焦点を当てたことは有益であったと考えられる。イギリス陸軍は病院や日々の軍隊生活に欠かせないこの作業の実践を、兵士の病気感染をコントロールできる衛生管理法として健康・衛生知識の浸透に効果的と捉えたのであった。

#### 4. ヘルス・ケア指導の進展

イギリス陸軍は調理担当者の訓練を展開する一方、これに関連して兵士に教育的なヘルス・ケア指導を推進した。陸軍の抱える多くの問題を提起したクリミア戦争後の1857-58年の陸軍衛生・病院組織改善調査委員会では、兵士が宿舎キッチンで配給肉を調理していた事例が取り上げられ、労働量に見合う食物を兵士に支給し彼らに適した食事調理法を改善することや、若い兵士への調理指導を担当するコック2名を各連隊に配置することも提案された<sup>22)</sup>。陸軍医学校衛生学教授パークスは、いずれ軍の配給は調理の必要な材料ではなく時間や輸送の手間を省く調理済の加工品に移行するとはいえ、兵士も調理を学ぶべきと述べた。衛生管理の充実には医官がこうした問題に関心を持つ必要があることからコックの訓練に賛同した<sup>23)</sup>。宿舎の調理設備は食事の調理作業を楽しみ、その技術習得を好む多くの若い兵士に実践機会をもたらした。パンの製造も従来のように好む者が担当するだけでなく、各兵士がその技術を身につければ戦地で役立つこと、そして除隊後にはパン職人として生計を成すこともできることに着目したイギリス陸軍は、フランス陸軍のような訓練の導入を検討したのだった<sup>24)</sup>。

イギリス陸軍は19世紀後半に健康と兵食問題への関心を一層強めて、インド、中国や地中海など暑い気候でも兵士が食欲を増進するよう肉の配給量を調整し、1870年のセイロンでは医官が肉と野菜を現地で生産する農場運営を提案するなど工夫を継続した<sup>25)</sup>。イギリス陸軍兵士の一日の食物配給量は肉が3/4ポンド（約340g、調理前の生肉で骨を含む）とパン1ポンド（約450g）であったが、1888年のイギリス陸軍兵食調査委員会以降は若干変更が加わった。この委員会では宿舎のキッチンや調理小屋の視察などから食物供給と調

理に関する問題を再検討し、食事の調理指導の充実を図ることと訓練済コックのあらゆる部門への配置を推奨した。医学や調理は専門外でも従軍経験から兵士の健康に貢献した一大佐は、栄養状態を少しでも良くするためくず肉や骨をスープにして、パンを減らして代わりに栄養価の高いバター、ジャム、卵、ベーコンやニンジンを兵士に供給することを試み、食物と調理の知識を得られる食事を兵士に提供するよう宿舎の使用人にコックの補助をさせることも提案した<sup>26)</sup>。しかし、配給された食物が良質でも衛生的に調理加工できなければ健康向上には役立たないため、食事調理とヘルス・ケア指導との連携をイギリス陸軍は重視していった。

熱帯地域の流行病に対処する予防医学の進歩、そして兵士を各連隊で監督する医官を軸としたヘルス・ケアの組織化がイギリス陸軍の衛生改革を促進した。海外において衛生管理を徹底できることから、1880年代より医学専門家も兵士による食事調理に注目するようになった。陸軍医学校衛生学助教授デイヴィス (A. Davies) は、イギリス陸軍では調理作業が系統的に行なわれていないことを問題視し、戦局に備えた訓練の必要性を指摘した。これは「イギリス兵士はどんな地域にも出兵でき、いかなることも可能である」ことを理想とする考えからであった。射撃法や疲労回復法を身につけるように、デイヴィスは陸軍における必須技能として兵士が食事の調理方法を学ぶことを提唱した<sup>27)</sup>。同様に陸軍医学校衛生学教授を務めたノター (J. Notter) も、兵士が十分に栄養を吸収できる適切な食事の調理法を指導すべきと述べた<sup>28)</sup>。良質な食事は飲酒を抑制し兵士を軍務に適した健康状態に保つ効果があるが、1890年代になっても宿舎の部屋で調理の下準備を行なう兵士や未熟な技術しか持たない調理担当者 (sergeant-cooks) がみられ、そのためヘルス・ケアとして調理に関する訓練・指導を丁寧に行なうことが求められた。この状況を踏まえてイギリス陸軍のさらなる衛生向上を喚起するよう、陸軍と同様に男性で構成された警察組織に焦点を当て、警察官は週に一度シーツを洗濯するにもかかわらず陸軍兵士が月に一度の実施では不十分であると意見する陸

軍医官もいた<sup>29)</sup>。このように比較の対象とされた警察組織であるロンドン警察にもやはり健康維持の規定があったが、勤務中に悪天候に煩わされ足に合わないブーツを着用し続けた結果、リューマチを患う者もいたという。1893年には警察官の勤務実態も取り上げる雑誌『ザ・ポリス・レビュー』が創刊され、同時期に設立した労働組合とともに警察官の労働や健康問題に対する関心を集めた<sup>30)</sup>。すなわち19世紀後半は、市民社会と軍事組織のいずれにおいても労働と健康に関する社会問題を人々が意識するようになった時期であったと考えることができる。

1880-90年代以降、食事の調理を兵士のヘルス・ケア活動に組み込んだイギリス陸軍は、それまで海外で頻繁に行なわれていた現地バザールでの食物購入を許可しないなどの規制を強化していった。とはいえ、インドでは1870年代まで高度な技術を持つ現地のコックがイギリス陸軍の調理を担当し、旧式の調理器具を使用しても満足のいく食事を提供していたため兵士による調理作業は当初コストの削減と管理を目的とした<sup>31)</sup>。たとえば流行病が発生しても、死亡する兵士をできる限り少なくとどめることが陸軍医官の義務であったことから、イギリス陸軍は1896年のインドでベスト流行時に行なわれたような個人衛生管理法、つまりヘルス・ケアの指導に重点を置くようになった。このころインドで細菌学研究に従事したハンキン(E. Hankin)も、細菌学に基づく細かな配慮こそが病気の感染防止に有効と主張していた。医官は調理小屋、食堂、兵士個人の衛生管理、食物供給、飲料水や牛乳の殺菌、食事調理時の衛生指導や井戸の消毒を計画的に実施した。特に調理小屋の監督は現地バザールでのコレラ感染ルート、調理器具の清潔さ、排水等を厳密に確認する必要から行なった。ハンキンの見解を受けて、パンジャブ地方で陸軍は調理作業そのものの改善も試みた。これは現地のコックが調理時に地面に直接置いた板を用いて作業をしていたことだけではなく、汚れたふきんや水桶の使用、食品衛生の不理解も病気感染を誘引するとみなされたためであった<sup>32)</sup>。陸軍兵士による調理の実施状況は地域毎に異なったが、ベンガルでは1900年代まで継

続した。調理小屋にハエの侵入を防ぐガーゼ張付が普及してから兵士の健康が著しく向上したという。また外部との接触を最小限にとどめ腸チフス感染を妨げようと、インドにて冬期あるいは高地駐留時に兵士が食事の調理を行なったところ衛生状態が改善の兆しをみせた。しかし医官の監督外であるバザールに出かけ、好奇心と不注意からそこでの飲食を通じて病気に感染した若い兵士は後を立たなかった。1902年のインドでイギリス陸軍の腸チフス患者は、1,012人のうち260人が死亡した。1903年でも1,366人が感染、292人が死亡ないしは療養中と患者数は減少せず、これは現地の衛生問題に兵士が無知であったことが原因と見受けられた。したがって病気感染後、治癒に要する時間を短縮して軍務に復帰するためにも兵士に対する教育的な衛生指導が重要となっていった<sup>33)</sup>。

このようにイギリス陸軍の衛生管理は食物供給システムとともに改良が続いていたが、共同便所の管理や調理器具の洗浄など野営地運営に関する細かな指導は行き届かなかった。兵士間の病気感染とそれに起因する死亡を防ぐには、全ての兵士が適切な知識を身につけ衛生を維持する方法を理解する必要があったのである。1881年に陸軍供給部(Army Service Corps)が編成され、ポア戦争期には食物供給事情が良くなったとはいっても野営地の生活は困難を伴った<sup>34)</sup>。ヘルス・ケアが重要課題となった20世紀初頭に、ポア戦争で南アフリカに赴いたイギリス陸軍兵士と士官が健康管理の難しさを経験した記録を残している。1900年に厳しい長時間の行軍を続けた青年兵士は、水不足の時は飲料以外の使用は許可されないため手を洗うことができず、翌年2月に赤痢に感染して死亡してしまった<sup>35)</sup>。若い士官も似たような体験をしていた。野営地には煮沸した水を使用する厳しい規則があり、高い気温の中でも牛乳や卵の入手を試みた。コックの技術不足のため部下と調理小屋を設置したが、それまでの粗悪な食事から体調を崩してしまったという<sup>36)</sup>。こうした数多くの従軍兵士の死や病気は、イギリス陸軍が兵士への実践的なヘルス・ケアとして導入した食事調理の推進にも影響を及ぼしていった。陸軍調理

学校による1910年以降の調理マニュアルもコックのみを調理作業の担当者とせず、全兵士が前線にて手早く食事を調理する方法を習得すべきと指摘し、1915年発行版では配給肉の処理を兵士が自ら行なうことも提案した<sup>37)</sup>。さらにイギリス陸軍が入隊兵士に支給した手帳も、野営中の食事の準備、調理器具や食器の適切な使用法、火の起こし方や野菜の保存食調理法に加え、兵士に基本的な衛生意識を持たせるため周囲を片付けてから調理に取り掛かること、汚れた食器や調理器具を使用しないことという注意事項を説明し、兵士による食事の調理をヘルス・ケアとして扱っていた<sup>38)</sup>。したがってクリミア戦争の失敗を繰り返さないためにも、ヘルス・ケア指導を行なって兵士の死亡率を下げ、そして何よりも食事を調理する能力を兵士が持つことが戦地での体調管理に役立つとイギリス陸軍は認識するようになったのである。

19世紀末のインドやボア戦争の影響から次々に発行されたヘルス・ケアに関するハンドブックのうち、士官対象のものは軍全体を統括することを意図して野営地の管理、食事準備法や調理器具を取り上げ、医官によるものはさらに宿舎や野営地における衛生維持法、兵士が調理作業を行なうことでの飲酒の減量への期待も述べていた。携帯して注意点を暗記するのに適した兵士向けの手帳大のハンドブックでは、入浴法の指導や足と歯のケアに加え、除隊後にも役立つ救急医療の技術習得を勧めるものもあった<sup>39)</sup>。そのひとつである、1906年発行の陸軍医療部中佐オルポート(H. Allport)による『兵士のための健康手引き』は、兵士ひとりひとりによるヘルス・ケアの必要性、ブーツの管理や入浴法、野営地での食事調理法を解説した。オルポートは市民社会と陸軍のいずれにおいても衛生管理の徹底を主張し、兵士に健康の知識を伝える講話を行なう衛生レクチャーを提案していた。その内容は兵士の日常生活に欠かせない新鮮な空気、日光、飲食物、衣類、部屋の清掃、入浴や歯磨き法などについてであった。指導の補助として毎週衛生検査を実施し、ワクチン接種や入院など兵士の衛生管理能力が問われる際にも繰り返し指導を行なうこと、そして士官には衛生レクチャーの教本にこの『手引き』を使用

することも推奨した。この小冊子は海外での機動力向上のため熱射病や腸チフスへの感染防止法、行軍時の足のケアやモラルに関する助言、狭い宿舎やテント内で病気を飛沫感染させる恐れのある唾液を吐く習慣など軍隊生活の全ての面に注意を促すものであった。オルポートは、身体を清潔にして節度を守り、野営地の衛生状態を管理して軍務に備えることはイギリス陸軍兵士の責任であると述べ、新鮮な空気とセルフ・コントロールは健康維持の「合言葉」であると強調した<sup>40)</sup>。また、このようなイギリス陸軍のヘルス・ケア指導とほぼ同時期に外国軍隊も衛生改善に取り組んでおり、一例として日本陸軍による日露戦争時の衛生指導が興味深い。日本陸軍は、国内と気候の異なる野営地と行軍中の衛生管理の注意点をまとめた『陣中衛生心得』という冊子8,750部を1904年2月に各部隊に配布、その後1905年6月までに夏期の病気感染予防を目的として9,550部以上を発行した<sup>41)</sup>。これには兵士による体調管理法、飲食にまつわる衛生問題への注意点が挙げられており、内容がイギリス陸軍のものと類似していただけではなく日本陸軍兵士もこの冊子に準じて衛生講話を受けたという。すなわち、個人衛生の管理が団体の衛生維持に重要な要素であるという共通認識が各国の軍事組織におけるヘルス・ケアの実践を後押ししていたといえよう。

20世紀に入ってもイギリス陸軍はヘルス・ケア指導を継続し、例えば1904年のパミューダでは陸軍所属者には足のケア方法のレクチャー、現地の配管工には衛生設備を説明するというような教育活動を展開した。インドでは多くの病気流行を経て、ようやく食物の扱い方も衛生問題として注意が払われるようになったものの、共同便所を不衛生なままにする若い兵士の衛生意識が低く、彼らへの指導が引き続き必要であった。陸軍は士官に、部下に対してヘルス・ケアと野営地管理の衛生レクチャーを毎週実施することを勧めた。こうして陸軍は広範なヘルス・ケア指導を行ない、全ての兵士に衛生管理の義務と責任があることを強調していった。そして1906-07年には陸軍衛生学校の設置が提案され、陸軍大尉への昇進にも衛生の試験が必須となり、兵士は行軍中にいつでも

読むことのできる衛生アドヴァイスを記載したピラ状の出版物の支給も受けたのだ<sup>42)</sup>。

1900年代からイギリス陸軍はさらに歯の衛生管理を取り入れて、兵士に歯ブラシを支給し日常的に使用させることも試みた。これは陸軍子弟の学校等の出身である若い兵士の歯の状態が特に良好であり、そこから指導により習慣化したヘルス・ケアの効果を陸軍が確認したことも一因であった。一方で、1909年に陸軍入隊の健康診断を受けた18%の男性は歯が悪いために入隊を許可されなかった<sup>43)</sup>。この入隊審査の結果に表れているだけでも、市民社会で成長した男性は陸軍兵士と比較するとヘルス・ケアや衛生の知識を身につける機会に乏しかったことが明らかであろう。イギリス陸軍兵士には水道等の衛生設備が十分に整わない中で成長した者も含まれていた。そのような生活環境では彼らが衛生問題について考えることは容易ではなかった。しかし、陸軍入隊後に繰り返し受けたヘルス・ケア指導により衛生意識が芽生えるにつれて、彼らはその水準を保つことが規則から習慣になったのである。イギリス陸軍の特徴は、兵士を軍務に適する強健な身体に鍛えるにとどまらず、健康と衛生の知識を定着させる努力を他の組織よりも継続して行なったことといえよう。すなわち、このような訓練がイギリス陸軍の「除隊後に兵士が市民生活に復帰した後も、社会にとって有益で健康な一員となること」という理念を支えたのではないだろうか<sup>44)</sup>。

## 5. おわりに

近代イギリス市民社会では、関心の低さだけではなく設備が整わないことから人々の健康・衛生問題への配慮が行き届かずとも、陸軍に所属した男性の場合は国内外の軍事活動として生活のあらゆる面を軍が掌握するため、ヘルス・ケアの知識を体得することが可能であった。イギリス陸軍医学校設立やヘルス・ケア指導の導入に貢献したナイチンゲールも評価するように、都市や建物、家庭の衛生維持に関与した市民社会の医師に対して、陸軍医官は兵士のヘルス・ケアを行ない個人と団体の衛生問題を包括して監督・管理する専門家であった<sup>45)</sup>。クリミア戦争以降のイギリス陸軍

のように兵士の健康状態は勢力拡大と帝国防衛に関係することから、軍隊組織は医学や科学の発達に貢献する研究機関としても機能していた。兵士が病気に苦しんだ海外派兵がなくては熱帯医学も進展しなかったであろうし、軍の衛生水準の向上をもたらした調理訓練やヘルス・ケアも異なった経緯で導入されたと考えられる。さらに19世紀後半から第一次世界大戦前は、イギリス国内外ともに市民社会と軍事組織の双方において、防疫、健康・衛生維持に関する問題への関心が高まった時期であった。イギリス陸軍による、実践的な健康管理の知識を兵士に伝えたヘルス・ケア指導と食事の調理訓練は軍全体の健康維持に有効となり、入隊した男性に生活習慣を改める貴重な経験を与えた。イギリス陸軍は衛生管理の専門的知識を日常生活にも役立つわかりやすい言葉に翻訳し、繰り返し訓練して定着させることで兵士の健康を向上させたのである。こうした経験を持つ男性たちを通じて、イギリス陸軍の衛生改革は当時の社会における衛生意識の普及にも少なからず影響をおよぼしたと考えることができるだろう。

## 注・参考文献

- 1) 代表的な研究として Cantlie, N.: *A History of The Army Medical Department*. London, 1974; Slade, A.: *When Private Contractors Fed the Army*. *Army Quarterly and Defence Journal*. 115: 160-166, 1985; Crowdy, J.P.: *The Science of the Soldier's Food*. *Army Quarterly and Defence Journal*. 110: 266-279, 1980. イギリス軍の記録を扱った研究例は Floud, R., Wachter, K. and Gregory, A.: *Height, Health and History: Nutritional Status in the United Kingdom, 1750-1930*. Cambridge, 1990.
- 2) 最近の研究に Hardy, A.: *Health and Medicine in Britain since 1860*. 12-46, Basingstoke, 2001. 鈴木晃仁「医学と医療の社会史」, 社会経済史学会/編『社会経済史学の課題と展望』, 434-436, 有斐閣, 2002.
- 3) Shepherd, J.: *The Crimean Doctors: A History of the British Medical Services in the Crimean War*. I. 308-309, Liverpool, 1991; Parkes, E.A.: *A Manual of Practical Hygiene, Prepared Especially for use in the Medical Service of the Army*. v-vi, London, 1864.
- 4) Cantlie: II. 376-378.
- 5) Shepherd: I. 316.
- 6) Aitken, W.: *On the Growth of the Recruit and Young Soldier, with a View to a Judicious Selection of "growing lads" for the Army, and a Regulated System of Teaching for*

- Recruits. vii–ix, London, 1862.
- 7) Matsushita, T., Nomura, S. and Takeuchi, T.: Academic Influence on Japan of Edmund Alexander Parkes, Pioneer of Modern Hygiene. *Environmental Health and Preventive Medicine*. 9: 9–12, 2004; 陸軍軍医学校『陸軍軍医学校五十年史』, 19–28, 46–61, 石黒忠恵「陸軍衛生部の創始時代」, 1–7, 不二出版(復刻版), 1988. 近代アジアに焦点を当てた研究動向は, 見市雅俊・斎藤修・脇村孝平・飯島渉/編『疫病・開発・帝国医療: アジアにおける病気と医療の歴史学』, 東京大学出版会, 2001を参照.
  - 8) クリミアでは4,600人のイギリス兵が戦闘で死亡したが, 13,000人が負傷しさらに17,500人が病死した. Cook, C. and Stevenson, J.: *The Longman Handbook of British History 1714–1980*. 212, London, 1983. George Williams to his brother, 13 December 1854, National Army Museum (NAM), London, Archives 6403-17. 看護婦の活躍は Summers, A.: *Angels and Citizens*. London, 1988を参照.
  - 9) ナイチンゲールとソワイエの活動は Smith, F.B.: *Florence Nightingale: Reputation and Power*. 25–71, London, 1982; Soyer, A.: *A Culinary Campaign*. 101–110, London, 1857など. Second Report from the Select Committee on the Army Before Sebastopol (Report of the Army Before Sebastopol), *British Parliamentary Papers (P.P.) IX (1854–55)*, 348, 380, 480–481.
  - 10) Crowdy: 267–268; Slade: 161; French Blake, R. L. V.: *The Crimean War*. 45, 108, London, 1971.
  - 11) First Report of the Army Before Sebastopol, P.P. IX (1854–55), 133; Second Report of the Army Before Sebastopol, P.P. IX (1854–55), 204–205, 248–249, 251, 572; Third Report of Army Before Sebastopol, P.P. IX (1854–55), 248.
  - 12) Cantlie: II. 217–223; Neal, J. B.: *The History of the Royal Army Medical College*. *Journal of the Royal Army Medical Corps (JRAMC)*. 13: 163–172, 1957.
  - 13) Parkes to Nightingale, 4 August 1860; Nightingale to Parkes, 9 August 1860, British Library, London, Nightingale Papers, Add. Mss. 45773, ff. 9–10; Army Medical Department Report for 1873 (Army Medical Report), P.P. XLIV (1875), 188.
  - 14) War Office, Instructions to Military Hospital Cooks, in the Preparation of Diets for Sick Soldiers. 3–4, 6–7, London, 1860.
  - 15) Report of a Committee appointed by the Secretary of State for War to Inquire into the Organization of the Army Hospital Corps, Hospital Management and Nursing in the Field, and the Sea Transport of Sick and Wounded, P.P. XVI (1883), xxviii, xxxv–xxxvii, 271–274, 278.
  - 16) Army Medical Report for 1884, P.P. XL (1886), 39; Report for 1890, P.P. L (1892), 47; Cantlie: II. 235. National Training School of Cookery, Executive Committee Minute Book, 3 May 1904, 14 July 1904, National Archives, London, ED164/3.
  - 17) Standing Orders for the Army Medical Staff in relation to the Medical Staff Corps. Appendix 3. 48–49, London, 1894.
  - 18) Grant, J.: *New System of Cooking for the Army*. *Journal of the Royal United Service Institution*. IV: 322–325, 1860; Copies of Any Reports made to His Royal Highness, the Commander-in-Chief, or the War Department, respecting the Working of Captain Grant's Kitchens, now in use at the camp at Aldershot and at Woolwich Barracks, P.P. XXXVII (1857–58), 1, 3, 8; Bell, R.: *A Good Plain Cook for the Army*. *Chambers Journal*. 1863, reprinted in *Army Catering Corps Yearbook 1971–72*, 43–45; General Report of the Commission appointed for Improving the Sanitary Condition of Barracks and Hospitals, P.P. XVI (1861), 113–114.
  - 19) Army Medical Report for 1863, P.P. XXXIII (1865), 286; Report for 1873, P.P. XLIV (1875), 39–40; History of the Army Catering Corps, NAM Archives 7004-3.
  - 20) Notebook on lectures at the Army School of Cookery. 116–118, 1905, MS of Felix Alexander Hadingue, NAM Archives 7211-62-1.
  - 21) Army Estimates of the Effective and Non-Effective Services, for 1871–72, P.P. XXXVIII (1871), 23; for 1887–88, P.P. XLVIII (1889), 27.
  - 22) Report of the Commissioner Appointed to Inquire into the Regulations Affecting the Sanitary Condition of the Army, the Organisation of Military Hospitals, and the Treatment of the Sick and Wounded (Report of the Sanitary Condition of the Army), P.P. XVIII (1857–58), 86, 93–94.
  - 23) Parkes: 166, 213–216, 274, 591–592.
  - 24) Report of the Sanitary Condition of the Army, P.P. XVIII (1857–58), 94, 98, 123, 194, 208.
  - 25) 例えば Army Medical Report for 1870, P.P. XXXVIII (1872), 28, 125; Report for 1873, P.P. XLIV (1875), 112, 216–217.
  - 26) *The Lancet*, 11 August 1888; Committee to inquire into the Question of Soldiers' Dietary, P.P. XVII (1889), 5–10, 15–16, 19–20.
  - 27) Davies, A. M.: *The Food of the Soldier*. 14, 27–32, Aldershot, 1888.
  - 28) Notter, J. L.: *The Soldier's Food, with Reference to Health and Efficiency for Service*. *Journal of the Royal United Service Institution*. 33: 556, 1889.
  - 29) Evatt, G. J. H.: *The Sanitary Care of the Soldier by his Officer, a lecture delivered at the Royal Artillery Institution, Woolwich, 19 January 1894*. 18–19, 24–26, Wellcome Library for the History and Understanding of Medicine, London, Archives and Manuscripts, RAMC Muniments, RAMC 474.
  - 30) *The Police Review and Parade Gossip*, 10 April 1893, 30 October, 1893; Allen, V. L.: *The National Union of Police and Prison Officers*. *Economic History Review*. XI: 133,

- 1958.
- 31) Army Medical Report for 1868, P.P. XLIII (1870), 170, 188.
- 32) Army Medical Report for 1896, P.P. LIV (1897), 175–176, 189; Hankin, E. H.: Cholera in Indian Cantonments and How to deal with it. Written for the case of Cantonment Magistrates, Medical Officers and others interested in the question. ii–iii, 30–31, 41, 45, 72–76, Allahabad, 1895; Report of the India Plague Commission, P.P. LXXII (1902), V, 1–9; Arnold, D.: Science, Technology and Medicine in Colonial India. 141–147, Cambridge, 2000.
- 33) Army Medical Report for 1898, P.P. LIII (1899), 182; Report for 1899, P.P. XXXIX (1901), 210; Report for 1901, P.P. XXXVIII (1903), 200–203; Report for 1902, P.P. LI (1904), 209; Report for 1903, P.P. XLVI (1905), 223; Hankin: ii–iii, 30–31, 41; Arnold, D.: Colonizing the Body: State Medicine and Epidemic Disease in Nineteenth-Century India. 64–67, 87–90, Berkeley, 1993.
- 34) Hay, I.: One Hundred Years of Army Nursing, the Story of the British Army Nursing Services, from the time of Florence Nightingale to the Present Day. 49–50, London, 1953.
- 35) Neal to his mother, 27 May 1900, letters of 9007, Private Harry Edward Neal, NAM Archives 8205-41.
- 36) Rowlandson to his father, 15 September 1900; Rowlandson to his mother, 2 October 1900, 15 October 1900, 8 April 1901, letters of Major Samuel Messiter Rowlandson to his family, NAM Archives 7708-42-16, 7708-42-19, 7708-42-20, 7708-42-43.
- 37) War Office, Manual of Military Cookery, prepared at the Army School of Cookery. 1–2, 59–60, London, 1910; War Office, Manual of Military Cooking and Dietary Mobilization, 39, London, 1915.
- 38) Soldier's Small Book. 22–24, NAM Archives 7211-62-2.
- 39) The Lancet, 10 January 1903; Wolseley, Sir G.: The Soldier's Pocket-Book for Field Service. 258–264, London, 1882; Eaton, R. C.: A Guide to Health: for the Use of Soldiers. ix, 56–57, 91–92, London, 1896. 兵士対象のものは Forrest, J. R.: The Soldier's Health and How to Preserve It. Aldershot, 1896 など.
- 40) Allport, H. K.: Health Memoranda for Soldiers. Gosport, 1906, NAM Archives 8001-1, belonging to Henry Kingston, attached to his Soldier's Small Book; Allport, H. K.: Training Soldiers in Personal Hygiene. JRAMC. III: 621–623, 1904; Blair, J. S. G.: 'In Arduis Fidelis': Centenary History of the Royal Army Medical Corps. 15, Edinburgh, 2001.
- 41) 陸軍省満大日記, 明治37年1月18日, 6月23日, 9月14日, 明治38年1月11日, 6月5日, 6月7日. 防衛庁防衛研究所, 陸満普 M37-5, M37-15, M37-20, M38-13, M40-2.
- 42) Army Medical Report for 1904, P.P. LXVIII (1906), 127; Report for 1907, P.P. LXIV (1908), 47–49, 80; The School of Army Sanitation, Aldershot. JRAMC. XI: 482–485, 1908.
- 43) Army Medical Report for 1908, P.P. LII (1909), 3; Report for 1909, P.P. XLVII (1911), 4.
- 44) Army Medical Report for 1906, P.P. LXIV (1908), 54–56.
- 45) Nightingale, F.: Notes on Matters Affecting the Health, Efficiency, and Hospital Administration of the British Army, founded chiefly on the experience of the late War. 278–279, London, 1858.

# Sanitary Reform in the British Army: Introducing Knowledge about Practical Healthcare

Yuriko AKIYAMA

Ph.D., King's College, University of London

This paper focuses on the development of healthcare and health instruction in the British army in the late nineteenth to twentieth centuries. Knowledge of health, nutrition and cooking could be just as important for men as for women, even though men did not have so many opportunities to know about these things in civilian life. In fact, the greatest chance for men to learn about healthcare was in military service. Its necessity, especially regarding personal care, was acknowledged at the time of the Crimean war, although it took a long time to put improvements into practice. Cookery developed as an effective way to deliver practical knowledge about health to soldiers; indeed, cooking and healthcare instruction became a part of Army regulations and medical officers expected that the instruction given would translate into useful common sense for later life. Cookery education started as training for hospital cooks; later it extended to individual cooking for troops in the field. For many young men, therefore, joining the armed forces provided a unique opportunity to alter their unhealthy life style, not only for the sake of the Army but for their own benefit and that of society at large.

**Key words:** British Army, sanitation, healthcare